建築的制作における場所の想起の問題

ル・コルビュジェの Église Saint Pierre の構想過程を通して

ON THE RECOLLECTION OF PLACE IN THE ARCHITECTURAL CREATION

In the case of the conception of 'Église Saint Pierre' by Le Corbusier

千代 章一郎*

Shoichiro SENDAI

This paper aims to elucidate the relationship between the architectural conception and the recollection of place in the creation of 'Église Saint Pierre' (1960-65) by Le Corbusier. The conception about this church has a close connection with the building site ("the form in the landscape"), at the same time, Le Corbusier recollects "the place of meditation" in 'Église de Tremblay' planned in the late 20's and "the silent place" in 'Santa Sophia' (Istanbul) visited in his journey in 1911. Thus, the interaction between the recollected places and the real site provokes the architect to find out the meaning of the architectural place.

Keywords : *conception, recollection, sketchbook, Le Corbusier, Église Saint Pierre*

構想過程, 想起, 手帖, ル・コルビュジェ, サン＝ピエールの教会堂

1. はじめに

本稿は建築的制作における建築家の思惟の様態を考察するために、ル・コルビュジェ Le Corbusier (1887-1965) によるフィルミニエのサン＝ピエール教会堂 Église Saint Pierre, Firminy, France (1960-1965) の制作に注目し、建築的構想とその過程において想起される場所との関連を明らかにする¹⁾。

筆者はすでに Église Saint Pierre の形態生成分析に関して、建築的形態の「原型prototype」を指摘し、原型生成の過程で敷地siteの景観構成が主題化されていく様相を明らかにしたが²⁾、敷地の景観は客観的対象というよりも、制作という契機を含む限りむしろ建築家の主観が介在する視覚像（ヴィジョン）と考えることもできよう³⁾。

そこでその建築的構想に注目すると、ル・コルビュジェは1964年、Église Saint Pierre の制作に関する著作を出版し⁴⁾、その巻頭に建築的構想が産出される有様を説明する次のような手稿を残している。

"Lorsqu'une tâche m'est confiée, j'ai / par habitude de la mettre au dedans de ma mémoire, / c'est-à-dire de ne me permettre aucun croquis, / pendant des mois. La tête humaine est ainsi / faite qu'elle possède une certaine indépendance : C'est / une boîte dans laquelle on peut verser en vrac les / éléments d'un problème. On laisse aller "flotter", "mijoter", / "fermenter".
// Puis un jour, dans une initiative spontanée de / l'être intérieur, le dédic se produit : on prend un / crayon, un fusain, des crayons de couleur (la couleur est /

la clef de la démarche) et on accouche / sur le papier : L'idée sort, - l'enfant sort, il / est venu au monde, il est né."⁵⁾

(一つの仕事を任されたら、私はそれを記憶の中に置いておくことにしている。つまり描くことを何カ月も自分に許さないことにしている。人間の脳はこのようなある種の独立性をもつよう出来ている。それは一つの箱であり中には問題の多くの要素が乱雑に注ぎ込まれている。そしてそれらの要素が「漂い」、「沸騰し」、「発酵する」ように放っておく。そしてある日、内的存在の自発性の中で始動が起こる。つまり鉛筆を、木炭を、色鉛筆を手に取り（色は歩みの鍵である）、紙の上に産出する。アイディアが芽生え、子どもが生まれる。それは世界に至り、誕生する）

ル・コルビュジェに従えば、紙の上に描かれる以前には、構想が頭という「一つの箱」の中にありながら表象しない。したがって、たとえ建築的構想の着想の源があり得るにしても、それは「漂い」、「沸騰し」、「発酵する」ことによって自己生成するため、建築家自身でさえ制御し得ないはずである。そして一定の潜在期間を経て手帖に「誕生」する建築的構想の表象が決定的であるならば、後はそれをいかに具現化するかという方法の問題に帰着しよう。

この引用文はChapelle de Ronchamp (1955) の制作に関する著作の一文と同一であり⁶⁾、ル・コルビュジェの建築的構想過程の概略をある程度一般的に示すものと考えられる。しかしながら、少なくとも Couvent de la Tourette (1960) の制作の場合、8年の設計期間で建築家

* 京都大学大学院工学研究科 助手・博士(工学)

Research Assoc., Graduate School of Eng., Kyoto Univ., Dr. Eng.

の思惟は様々な建築的構想として組み立てられ、変容していくことがすでに示された⁷⁾。そして建築家によって研究される建築的形態の意味は、例えばロジアの構想の場合、ル・コルビュジェが「東方への旅」(1911)などで訪れたシャルトルーズ会エマの修道院での経験を色濃く反映していた。言い換えれば、ある敷地における建築的構想は、物理的な歳月を越えて生きられた経験的な「場所lieu」⁸⁾のイメージを内包していると考えられる。

そこで本稿では、Église Saint Pierreの制作における設計依頼からル・コルビュジェの死によって計画が頓挫するまでのおよそ5年間の建築的構想を、ル・コルビュジェの言う「誕生」を機軸にして辿りながら、想起される場所を順次抽出していく。結果を先に言えば、ル・コルビュジェによって言及される有意味な場所は二つと考えられる。しかし本稿では、想起される諸々の場所を指摘するだけではなく、さらに制作における敷地と想起される場所との関連を分析し、敷地への配慮によって、逆説的に「ここにはない」場所が想起されるという建築家の思惟の様態を明らかにすることを試みる。

なお、本稿におけるÉglise Saint Pierreの制作過程については、*Le Corbusier Archive XXXI*, Garland Publishing, Inc. and Fondation Le Corbusier, New York, London, Paris, 1984, pp.298-368の176図面を、またその手帖に関しては、*Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, Fondation Le Corbusier, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1982を基礎資料とした。ならびにFondation Le Corbusier, Parisに保存されているÉglise Saint Pierreに関する全454文書を建築家の思惟を解釈する主要な資料とした⁹⁾。

2. Église Saint Pierreに関する既往研究について

Église Saint Pierreの研究論文は比較的少ないが¹⁰⁾、とくに本稿の主題に関して、Eardley論文がÉglise Saint Pierreの建築的形態について論じる際、制作過程で参照される形態を分析しているため、本稿の論点と重なることも少なくない¹¹⁾。Eardley論文は、様々な参照形態を指摘することによって、最終的なÉglise Saint Pierreの建築的形態を、水平線もしくは地平を背景にして起立する一枚岩すなわち「モノリスmonolith」と解釈する。しかしこうした解釈において、Eardley論文は形態に込められるル・コルビュジェの意志の強さを論じ、具体的な敷地の問題から遠ざかっている。それに対して本稿では、建築家の思惟を内的理念から解釈するのではなく、むしろ従来は外的として扱われてきた敷地の環境要因を建築的製作の基底的要因として扱い、また構想過程そのものに着目して、敷地という外部が内面化される過程から建築家の思惟のあり方を解釈するものである。

3. 計画依頼の経緯

ル・コルビュジェが1960年に依頼されたÉglise Saint Pierreの敷地は、1954年の都市計画に基づいて整備された新興住居地区「フィルミニ＝ヴェールFirminy-Vert」に位置する。ル・コルビュジェ自身が教会堂建設の計画に関与することはなく、第二次大戦後の建設復興大臣で1953年よりフィルミニ＝市長となったE.クロディウス＝ブティEugène Claudius Petitが主導となり、A.シヴAndré Sive, M.ルーMarcel Rouxらの都市計画局によって全体計画が練られている¹²⁾。はじめクロディウス＝ブティは、ある丘の上の礼拝堂を想定していたが¹³⁾、最終的にフィルミニ＝ヴェールに教会堂の建設を決定し¹⁴⁾、サン

＝ティエンヌSaint-Étienneの司教に小教区設置を手紙で依頼する。ル・コルビュジェへの教会堂建設の実質的な依頼は、60年3月31日にル・コルビュジェがクロディウス＝ブティからその手紙の複写を直接受け取ることに始まる。

“Ils sont conscients de leur responsabilités : / bâtir une église, leur église, ce n'est pas une / fantaisie, c'est un acte dont ils mesurent l'importance. / Ils ne veulent pas de faux-sembant, ils veulent / du vrai. Ils ne désirent ni la richesse des moyens / ni la curiosité technique. Ils désirent que l'esprit / anime la pauvre matière et donne un sens aux / volumes, à l'espace, à la lumière. Une méditation / devenue réalité. Ils pensent que Le Corbusier / mieux qu'un autre peut donner cela : je crois qu'ils / ont raison.”¹⁵⁾

(彼ら[シヴ、ルーらの都市計画局の人々]は教会堂を建てること、自分たちの教会堂を建てることに責務を感じています。それは気紛れではありません。何が重要かを測る行為なのです。彼らは偽物を望んでいるわけではありません。本物を望んでいるのです。豊かなものも奇抜な技術も望んでいません。彼らは精神によって貧しい素材が活気づき、ヴォリューム、空間、光に意味が与えられることを望んでいるのです。黙考が現実味を帯びたのです。彼らは他の誰よりもル・コルビュジェがそれを与えてくれると考えています。彼らは正しいと思います)

手紙で述べられているのは、主に教会堂建設がフィルミニ＝ヴェールの都市計画に持つ意義であり、また、ル・コルビュジェが宗教建築を専門としないことに対する司教の懸念を払拭することに主眼が置かれている。教会堂建設に関する与件にル・コルビュジェの新たな関心を引く内容が含まれているとは考え難く、事実ル・コルビュジェははじめ依頼を断っている¹⁶⁾。また同時期、ル・コルビュジェは多くの宗教建築の設計を依頼され¹⁷⁾、中には制約が少なく建築家に好都合な計画も見受けられるにもかかわらず、結果的にそれらすべてを断っている¹⁸⁾。ところがル・コルビュジェは、最終的には決して好条件と言えないÉglise Saint Pierreの計画を受け入れるのである。実際的な理由の一つとして、クロディウス＝ブティとの個人的な信頼関係もあろう¹⁹⁾。

しかし計画依頼の15ヶ月後、ル・コルビュジェは『宗教芸術Art Sacré』誌の編集長、神父コカニャックM.A. Cocagnacに対して、Église Saint Pierreの計画依頼を受託した理由を次のように述べている。

“D'autre part, mon intention était de vous contacter au sujet de l'église que je fais pour Claudius Petit à Firminy. Il m'a forcé la main, mais j'ai accepté de faire cette chose là, les conditions topographiques et géographiques étant admissibles. J'ai fait un plan et je voudrais pouvoir en discuter avec vous un jour, à la rentrée de septembre-octobre, pour voir si vous l'approuvez du point de vue rituel. Ce plan est accepté en principe. Seriez vous assez gentil pour accepter de venir faire un saut à l'atelier une fois ? Je vous en remercie sincèrement à l'avance.”²⁰⁾

(また、手紙をさしあげたのは、クロディウス＝ブティのために計画した教会堂の件について話しかけたからでもあります。彼が強いのですが、私は受け入れました。地理地勢の条件が容認し得たからです。私はプランを作りました。そこで、宗教儀礼の観点から賛同できる計画であるかどうか、[インドから]帰国する9月か10月にでもあなたと議論したいのです。この計画は原則的には受け入れられています。一度アトリエに立ち寄っていただけないでしょうか。宜しくお願い致します)

建設が予定された敷地は窪地の最下部に位置し、以前からル・コルビュジェが目し、その手帖にしばしば描く土地の景観²¹⁾とは異なる。『全集(Euvres Complètes)』全8巻に拠る限り、ル・コルビュジェはこうした地理地形での制作を経験していないが、青年期より建築作品の敷地に注目してきたル・コルビュジェが²²⁾、制作経験的な

いÉglise Saint Pierreの地理的条件に関心を抱いたことは想像に難くない。ル・コルビュジェが計画を受託したのは、何よりもまず敷地が「容認し得る」からであるが、そこにル・コルビュジェの積極的な敷地への関心を読み取ることができよう²³⁾。

4. 建築的構想の「誕生」を巡って

4.1. 敷地の景観描写と「景観の中の形態」

さて、先述の手紙の複写をル・コルビュジェがクロディウス＝ブティから直接受け取ってからおよそ2カ月半後、サン＝ピエール小教区協会Association Paroissiale de Saint Pierreがフィルミニエー市から土地を買収することになり、建設地を最終的に定める目的で、ル・コルビュジェは60年6月19日に敷地を訪問する。クロディウス＝ブティの回想によれば、ル・コルビュジェは手帖を携えてフィルミニエー＝ヴェール中を歩き回り、敷地の周辺環境を観察している²⁴⁾。

図1 ル・コルビュジェによる手帖の景観描写(60年6月19日)²⁵⁾

この時期、ル・コルビュジェはフィルミニエー＝ヴェールの文化・スポーツ地区Centre Culture et SportifにMaison de la Jeunesse et de la Culture (青年文化の家)、Stade (競技場)、やや南西に離れた丘の上にUnité d'Habitation (住居単位)を計画しており、すでに手帖に手にフィルミニエー＝ヴェールを2度訪れている。しかしル・コルビュジェがこの2度の訪問で手帖に計画地を描く位置は文化・スポーツ地区内に限られており、60年6月19日のような広範な敷地の景観描写は認められない²⁶⁾。事実、手帖に残された3枚のスケッチは以前とは異なる様相を示し²⁷⁾、Église Saint Pierreの制作に関わるのは初めての敷地訪問で、ル・コルビュジェはUnité d'Habitationが予定された丘陵地の上から教会堂の敷地を描き、建設用地を位置づけている(図1参照)。そこは敷地の景観が最も明快に開かれる位置であり、教会堂の位置を示す一本の垂直線が引かれたその景観描写は、敷地の地形的特徴以上に後のÉglise Saint Pierreの建築的構成を暗示している²⁸⁾。

図2 ル・コルビュジェによる手帖のÉglise Saint Pierre素描(61年6月18日)²⁹⁾
[但し、図中の加筆は筆者による]

またこの敷地訪問でル・コルビュジェは、クロディウス＝ブティ、サン＝ピエール小教区協会長のJ.F. ボーJean François Baud、秘

書神父R.タルディRoger Tardyらと会見し、具体的なプログラムを開かされている³⁰⁾。ところが、ル・コルビュジェがÉglise Saint Pierreの建築的構想を手帖の上に描くのはその1年後、61年6月4日から同年6月18日までのほぼ2週間の間のことである。その間断続的に描かれた手帖の素描³¹⁾では教会堂のヴォリュームに加え鐘楼clocher、司祭館présbytère等のヴォリュームが描かれている。ル・コルビュジェの言う建築的構想の「誕生」である(図2参照)。

そして61年6月24日、ル・コルビュジェは再び敷地を訪問する。手帖の素描³²⁾には、すでに検討済みの建築的形態が敷地に据えられて、はじめてフィルミニエー＝ヴェールを訪れた時と同じ方位から仮想の建築的景観が描かれている。すなわちそれは、

“première / inspiration de l'Église : sa forme dans le paysage”³³⁾
(教会堂のはじめの着想 : 景観の中の形態)

というル・コルビュジェの言を再現していよう。このように、敷地を観察して手帖に景観を描出するという行為そのものが、窪地という敷地での「景観的構想」³⁴⁾を準備し、「ある日」ル・コルビュジェの手帖上にそれが「誕生」し、かつまたその形態表象が具体的に敷地の現場で検証されていく。その後、具体的な与件の更なる検討によって詳細が修正され、およそ1年後にまとめられた62年6月25日の段階での一連の図面によってル・コルビュジェは計画案が「出来上がった」と言う³⁵⁾。それは61年6月18日の手帖の図面化であり、「誕生」した構想の具体化完了が判断されたことを意味しよう。

4.2. Église de Tremblayの「瞑想の場所」

一方でル・コルビュジェは、先述の1964年の著作の中で、1920年代後期にパリ郊外に計画されたÉglise de Tremblayを想起したと言う。

図3 ル・コルビュジェによるÉglise de Tremblayのスケッチ(29年5月・6月)³⁶⁾

“Une idée d'église, venue autour / de 1925-30. - venue un / beau jour / = venue un beau jour”³⁷⁾

(教会堂の一つのアイディア。それは1925年～30年から到来した、あるよき日＝「あのよき日」が到来したのだ)

ル・コルビュジェ自身はÉglise Saint Pierreの制作のどの時点でÉglise de Tremblay (図3参照)を想起したかについては言及していない。しかし、Fondation Le Corbusierに保管されたÉglise de Tremblayに関する文書資料の一つに、「フィルミニエーの教会堂? 1960年」との走り書きが付け加えられたメモが認められる³⁸⁾。つまり、Église de Tremblayが想起されたのは、手帖にÉglise Saint Pierreの建築的構想がはじめて表象する61年6月4日以前、すなわち建築的構想の「誕生」を準備する潜在期間であったと推定される。

さて、1929年にÉglise de Tremblayの計画を断念する時、ル・コルビュジェはその計画を次のように述懐している。

“Nos réflexions nous / ont conduits à admettre qu'en toute sincérité, qu'en / toute conscience, nous ne pouvions ~~pas~~ construire une / église catholique : ceci pour deux raisons. La première / c'est que si l'on veut respecter le culte catholique / et ses traditions, on ne peut avec le béton que / “moderniser” une conception préexistante. Et cela / nous est pénible, car nous aurions à créer / des organismes neufs basés sur des problèmes d'esprit / neufs. La seconde, c'est que - si nous suivons / la voie qui nous est chère, nous pensons à / créer ~~une~~ un lieu de méditation. Et nous avons / établi une étude de principe sur ce thème et / nous avons une solution qui nous satisfait. Or, / dans un tel cadre, les objets de culte catholique / apparaissent paradoxaux. Mais plus encore, / l'attitude d'un tel bâtiment.”³⁹⁾

(我々は【計画を】熟考することで、カトリック教会堂を建設できないという事態を誠実かつ意識的に認めるに至りました。それには2つの理由があります。まず第1に、人々がカトリック信仰とその伝統を尊重したいなら、コンクリートを用いても先存の考え方を「近代化する」ことしかできません。我々にとってそれは耐え難いことです。なぜなら、我々は新しい精神の諸問題に基づく新しい組織を創造すべきだからです。第2に、我々の歩みが価値あるものだとすれば、我々は瞑想の場所を創造することを考えているのです。その主題について原理的な検討を終えましたし、満足のゆく解決法も手にしています。ところがこのような【計画の】枠組みでは、カトリックの祭礼の道具は奇異に見えます。さらにこのような建物の表情も【伝統的な祭礼には合わないことでしょう】)

計画断念の理由は必ずしも論理的に説明されていないが、ル・コルビュジェの考えでは、「近代化する」ことは単に建築の器をコンクリートにすることではなく、「新しい」創造の形式を要請する。しかしそれは「瞑想の場所の創造」としても言及されていることから、「瞑想の場所」の意図は、単に教会建築のための特殊解ではなく、カトリックの伝統や慣習が覆い隠してしまった本来の人間の信仰のあり方を探求することにあったと考えられよう。

たしかにÉglise de TremblayとÉglise Saint Pierreとは原型的に類同する⁴⁰⁾。しかし「瞑想の場所」として構想されたÉglise de Tremblayが、Église Saint Pierreの単なる参照物であったとは考え難い。むしろ建築的構想の「誕生」以前、Église Saint Pierreのしかるべき位置の考察によって景観における垂直性が読み取られ、その構想の潜在期間に、やはり極めて垂直性の強いヴォリュームのÉglise de Tremblayが想起されたことに注目すべきであろう。「瞑想の場所」が探求された30年余り前の「よき日」は、形態化以前に、Église Saint Pierreの敷地への眼差しと重なっているのである。

5. 建築的構想の「誕生」以後

5.1. 建築的形態の取捨選択

図4 Église Saint Pierreの建築的ヴォリュームの再検討⁴¹⁾
[但し、図中の加筆は筆者による]

さて、ル・コルビュジェが62年5月25日にその完了を判断した計画案に対して、神父タルディは次の変更を要請する。

“Enfin, comme je vous l'ai déjà signalé, il y a une chose qui m'ennuie c'est la Chapelle d'hiver, située au niveau inférieur. Nous allons rencontrer des difficultés tant sur le plan de l'Office Diocésain que du côté de la Commission Nationale d'Art Sacré, car ces chapelles sont toujours prévues en extension de l'église.”⁴²⁾
(最後に、すでにお伝えしたように、懸念していることがあります。それは【教会堂階の】下階に位置する冬の礼拝室【註：教会堂付属礼拝室】のことです。司教区事務局や宗教芸術国民委員会の計画に対して、我々は困難に直面することでしょう。というも、こうした小礼拝室はつねに教会堂の外に延びるかたちで計画されるからです)

62年12月1日の神父タルディのこの要求は、教会堂としての機能の問題に言及したもので、実際ル・コルビュジェはすぐに再検討に取りかかり(図4参照)、62年12月12日には修正図面が作成されている⁴³⁾。しかし、基壇部分に位置していた礼拝室を教会堂と同一階に配置することによって諸室の配置は大幅に再編され、最終的には教会堂内部の演壇の廃止とそれに伴う鐘楼、外部階段の削除、斜路の縮小化によって大幅に単純化されたヴォリュームとなる⁴⁴⁾。このような修正は当初からの懸案であった建設費の問題とも関わっているが⁴⁵⁾、景観に関連させて据えたヴォリュームを部分的に削減していくという仕方は、ル・コルビュジェの常套手段ではない⁴⁶⁾。

後にル・コルビュジェはこの経緯を神父タルディに説明している。

“Tout cela a demandé de nombreuses semaines de patients efforts, de mises au point, de recherches obstinées pour atteindre, par une organisation détaillée des différentes opérations, par une élimination systématique de l'inutile ou du superflu, un prix global voisin du prix fixé au contrat du 22 Mai 1963.”⁴⁷⁾

(これらすべてに何週間もの忍耐強い努力が要求されました。問題を詰めて、しつこく追求して、1963年5月22日の契約に定められた額に近づけるため、いろいろな操作を細かく組み立てて、不必要なものや過剰なものを系統的に取り除きました)

このように、Église Saint Pierreの制作におけるこの事態に限っては、結果的に削減される建築的ヴォリュームが「不必要なもの」あるいは「過剰なもの」と判断され、形態要素が部分的には採用されながらも部分的には廃棄されていく。その「過剰なもの」とは手帖に「誕生」した建築的構想の決定的表象の一部に他ならないのである。たしかにこうした取捨選択は、建設費や諸室の配置に関わる外的な諸条件を鑑み、ル・コルビュジェが意識的に選択したことであろう。しかし、「景観の中の形態」のあるものは肯定し、あるものは否定するその選択の判断基準がここで説明されているわけではない。

5.2. 聖ソフィア寺院の「静寂の場所」

図5 ル・コルビュジェによるÉglise Saint Pierreの採光の検討(62年12月19日)⁴⁸⁾

このようにして建築的ヴォリュームが部分的に削除される一方で、その高さの削減も検討され、62年の終わり頃には天空から主祭壇に注ぐ採光が明確に主題化される⁴⁹⁾。そして62年12月19日、ル・コルビュジェは主祭壇への光線をスケッチに描き出す(図5参照)。

図6 ル・コルビュジェによる聖ソフィア寺院の光の素描(63年1月2日)⁵⁰⁾

その後63年1月2日、ル・コルビュジェは「東方への旅」の途ではじめて訪れたイスタンブールの聖ソフィア寺院内の採光を描いた過去の手帖を参照して再度その空間表象を描き（図6参照）、1964年の著作で次のように記している。

“Elle évoque la splendide “Unité” de Ste Sophie de Constantinople / longuement étudiée en 1910 par L-C, sur place à Istanbul, et / les possibilités (à réaction poétique) de l’entrée de la lumière / solaire dans un édifice”⁵¹⁾

（それ【図6】は、ル・コルビュジェが1910年にイスタンブールの現地で詳しく研究したコンスタンチノーブルの聖ソフィア寺院の壮麗な「統一」を思い出させる。そして建物への太陽光の入射の（詩的反応の）可能性を。．．．）

ル・コルビュジェがここで言う聖ソフィア寺院の「統一」は、「東方への旅」の経験⁵²⁾においては、次のように記されている。

“Il faut un lieu silencieux qui ait un visage tourné vers la Mecque. Il doit être vaste pour que le cœur se sente d’aise, haut pour que les prières y respirent. Il faut une ample lumière diffuse afin qu’il n’y ait nulle ombre, et dans tout l’ensemble une simplicité parfaite ; et une immensité doit être enclose dans les formes.”⁵³⁾

（メッカの方角を向いた静寂の場所が必要である。そこには心が自ら安らぐための広大さ、祈りが息づく高さが必要である。いかなる驕りもないよう広がる十分な光と、全体の完全な単純性が必要であり、形態の内には無限が内包されていなければならない）

かりに構想における形と意味が一对一対応するならば、Église Saint Pierreの制作にドーム型が参照されなければならないが、聖ソフィア寺院を覆う光はÉglise Saint Pierreのそれと表象的には異なっている。しかし1910年頃、「静寂の場所」としての聖ソフィア寺院内部の物理的単純さに、ル・コルビュジェは意味的な「無限」を看取する。つまり光に満ちたその内部を見上げるとき、「形態を捕まえられる広大な空間」⁵⁴⁾として天空が目指され、もはや対象の距離を測り得ないような場所が経験され、1964年にはその一体感が、「統一」として理解されているのである。それ故、Église Saint Pierreの制作における聖ソフィア寺院の想起は、規模縮小に際する高さの削減に障碍されることのない意味的な高さを光によって獲得するためであったと解釈できよう⁵⁵⁾。こうして聖ソフィア寺院の場所を想起することによって、ル・コルビュジェは彼の建築的制作では極めて稀な再三に渡るヴォリュームの削減を心得たのである。

しかし、建設費の問題もあってか、サン＝ピエール小教区協会は64年4月7日、新開発地区フィルミニ＝ヴェールを「司牧の敷地 site pastoral」、つまり信者の教唆の地として適さないと見做し、この敷地での建設を断念し、ル・コルビュジェに別の敷地を提案する⁵⁶⁾。サン＝ピエール小教区協会の指摘が唐突であったこともさることながら、ル・コルビュジェはこの提案を明確に拒否する。なぜなら、

“J’ai fait l’Église de Ronchamp.

J’ai fait l’Église du Couvent de la Tourette.

J’ai fait des plans remarquables de l’Église en question, de Firminy-Vert. Cette église, le Stade, la Maison de la Jeunesse et de la Culture et l’Unité d’Habitation constituent un “ensemble Le Corbusier”. Il faut le réaliser tel et non pas le modifier pour des petites causes d’intérêt local. L’Église de Firminy-Vert aura le même destin que l’Église de Ronchamp et celle du Couvent de la Tourette.”⁵⁷⁾

（私はロンシャンの教会堂をつくりました。

私はラ・トゥーレットの教会堂をつくりました。

私はフィルミニ＝ヴェールに懸案となっている教会堂の素晴らしい計画案をつくりました。教会堂、スタジアム、青年文化の家、住居単位はひとつの「アンサンブル・ル・コルビュジェ」を構成しているのです。このようにして具現化されなければなりません。地域的な利益という些細な原因で修正されてはなりません。フィルミニ＝ヴェールの教会堂はロンシャンやラ・トゥーレットの教会堂と同じ運命となるのです）

図7 ル・コルビュジェによる生前最後のÉglise Saint Pierreの検討(64年7月8日)⁵⁸⁾

ル・コルビュジェによれば、「景観の中の形態」として構想されたÉglise Saint Pierreは、Chapelle de RonchampやCouvent de la Touretteが各々の敷地との関連で構想されたように、当然現敷地に在らねばならない。そこでル・コルビュジェは、建設費軽減のために更なる高さ削減を検討し、妥協案を提示する（図7参照）。最初期の建築的ヴォリュームと比較すると、実に40%近くの高さ削減である（50mから33mへ）。つまり、聖ソフィア寺院の想起によって看取されたÉglise Saint Pierreの意味的な高みは、その敷地に据えられていることによって成立していたのである⁵⁹⁾。

しかし結局サン＝テティエンヌの司教の協力が得られず、資金不足のため計画は中断する。司教によれば、Église Saint Pierreはある意味でÉglise de Tremblay同様、「前衛的すぎる」⁶⁰⁾からであった。

6. おわりに

以上、本稿ではÉglise Saint Pierreの建築的構想の過程に注目し、その過程で想起される有意味な場所を二つ抽出した（表1参照）。

Église Saint Pierreの建築的構想は、敷地の景観描写に誘発されて謂わば多産的に素描されて「誕生」し、「景観の中の形態」として言及されるように、敷地との密接な関連を持っている。しかし「誕生」以前、すなわちÉglise Saint Pierreの建築的構想が「記憶の中」に在る時期の敷地訪問でÉglise Saint Pierreのしかるべき位置が考察されたとき、そこで読み取られた景観構造と重なって、Église de Tremblayの「瞑想の場所」が教会堂における本来的な信仰のあり方として想起される。また「誕生」以後、高さの削減と教会堂内部の採光効果を検討する過程で、聖ソフィア寺院の光に満ちた「静寂の場所」が意味的な高みを有するものとして想起され、こうして敷地に据えられた建築作品が見出されていくのである⁶¹⁾。

年代	構想の経緯	想起された場所／その意味
60.3.31	計画依頼と受託 (敷地への関心)	
60.6.19	敷地訪問と景観描写 「記憶の中」	⇒ Église de Tremblay／「瞑想の場所」
61.6.4-6.18	構想の「誕生」	
61.6.24	敷地訪問と建築的景観描写 →「景観の中の形態」	
61.7.11	草案図面作成	
62.6.25	図面完成を判断	
62.12.1	神父タルディの修正要請	
62.12.12	形態単純化・修正図面作成	
63.1.2	高さ削減と採光検討	⇒ 聖ソフィア寺院／「静寂の場所」 「形態を捕まえられる広大な空間」
63.5.22	正式契約	
63.12.23	最終図面作成	
64.4.7	現敷地での建設断念通知	
64.5.21	Église Saint Pierreの著作執筆	
64.7.8	生前最後の高さ削減検討	

表1 建築的構想の過程（筆者作成、但し「」内はル・コルビュジェの言葉）

以上要するに、建築的構想過程において想起される場所は、現実の敷地へ眼差しが向けられるまさにそのときに再び見出される対象であることが明らかになった。そして想起される場所は、構想に直接反映される形態表象というよりも、むしろ想起される場所によって、敷地に据えられた建築作品の意味が照射されることを指摘した。つまり、制作の敷地とかつての経験的な場所は、謂わば双方向的に照らし合っているのである。

謝辞

資料の閲覧収集に関しては、Fondation Le Corbusierはもとより、Mairie de Firminyの建築家Luc Pages氏、Association “Le Corbusier, pour l'Église de Firminy-Vert”の相談役Roger Aujame氏の助力に負っている。記して謝意を表したい。

註

* 本稿の引用はすべて原文のままである。手稿に関しては、記号／によって改行位置を示した。また書簡故文意の曖昧な箇所は、邦訳内の記号〔 〕に適時注記した。

¹⁾ ル・コルビュジェの建築的制作における「想起」の問題についての研究は、制作過程で参照される形態の指摘に留まるものが多く、制作と想起の対象との関連性の問題は一般的には未着手である。とくにPierre Saddy: “Le passé à réaction poétique”, in *Le passé à réaction poétique*, Caisse nationale des Monuments historiques et des Sites, 1988, pp.15-28及びDanièle Pauly: “« Ce passé qui fut mon seul maître »”, in *Le Corbusier et la méditerranée*, Les Éditions Paranthèses, Marseille, 1987, pp.51-61はル・コルビュジェにおける「歴史・histoire」もしくは「過去・passé」の力動性を主題化して注目されるが、建築的制作における思惟の過程は必ずしも主題的に考察されていない。なお、Église Saint Pierreの事例に関する既往研究については本稿2節参照。

²⁾ 千代章一郎: 「ル・コルビュジェのÉglise Saint Pierreの制作における原型と景観構成」, 日本建築学会計画系論文集, 第501号, 1997年11月, pp.227-234

³⁾ 景観を巡る知覚の問題の理論的論考についてはとくにMichel Collot: “Points de vue sur la perception des paysages”, in sous la direction d'Alain Poger, *La théorie du paysage en France*, Les Éditions Champ Vallon, Seyss, 1995, pp.211-212参照。

⁴⁾ Le Corbusier, Keller Smith ed.: *The Development by Le Corbusier of the Design for l'Église de Firminy a Church in France*, Student Publications of School of Design North Carolina State of University of North Carolina at Raleigh Vol.14 n°2, s.p., 1964. これはK.スミスKeller Smithからカーペンター・センターCarpenter

Visual Arts Center, Boston, U.S.A. (1961)についての出版物を依頼された際、ル・コルビュジェが逆提案して実現した著作である(G3(S)68, ル・コルビュジェがスミスに宛てた手紙, 64.2.3)。

⁵⁾ Le Corbusier, Keller Smith ed.: *op.cit.*, s.p.

⁶⁾ Le Corbusier: *Textes et dessins pour Ronchamp*, réed., Association œuvre de N.D. du Haut, Ronchamp, 1975 (1965), s.p.

⁷⁾ 千代章一郎・加藤邦男: 「作品の現成と建築家を巡る場所論的考察の試み—ル・コルビュジェのCouvent de la Touretteの制作を通して」, 日本建築学会計画系論文集, No.494, 1997.4, pp.253-260参照。

⁸⁾ ル・コルビュジェは、敷地の建築作品とそれを経験する人間主体を支える建築的な場所を「全体を統合する正確で数学的な場所des lieux précis, lieux mathématiques, qui intègrent l'ensemble」と言う(Le Corbusier: “Les tendances de l'architecture rationaliste en rapport avec la collaboration de la peinture et de la sculpture”, in *l'Architecture vivante*, vol.VII, Paris, 1937, pp.12-13)。本稿ではル・コルビュジェの「場所」の観念との対照で、建設のごく物理的な用地を「敷地site」とする。また、経験的な意味を内包する場所の想起と表象的な形態の参照を言葉の上で区別しておきたい。

⁹⁾ N1(1), N1(2), U1(19). 加えてN1(3), N1(5), N1(6), N1(7) (Centre Sportif); M1(3) (Maison de la Jeunesse et de la Culture); M2(1) (Piscine Municipale); N2(19) (Unité); E1(4) (L'Art Sacré); R3(4) (André Sive); E1(16) (Eugène Claudius Petit); U2(9) (Église de Tremblay); I2(16) (Église à Bologne); I2(8) (Projet-demande); G1(17)-G1(20), G3(1)-G3(7) (Courrier Chronologique 1960-1965)を随時参照した。なお、Fondation Le Corbusierに保管されている資料の内、書簡文書はその整理番号を、図面はFLC記号を付して示す。

¹⁰⁾ 主要な論文については千代: 前掲論文註8)参照。

¹¹⁾ cf., Anthony Eardley: “Grandeur is in the Intension”, in *Le Corbusier's Firming Church*, The Institute for Architecture and Urban Studies and Rizzoli International Publications, Inc., New York, 1981, pp.4-23

¹²⁾ フィルミニーの都市計画については*Urbanisme*, n°104, vol.37, 1968, pp.2-50参照。なおクロディウス＝プティによれば、ル・コルビュジェに都市計画を依頼しなかったのは、当時フィルミニー市民はその都市計画を受け入れるほど熟していなかったからである(cf., Eugène Claudius Petit: “Firming Cité Exemple”, *La Galerie des Arts*, Paris, n°61, 1968.12.15, p.22)。

¹³⁾ U1(19)3, クロディウス＝プティがマジウ卿Monseigneur Maziouxに宛てた手紙, 61.1.2.参照。しかしその敷地の位置を示す資料は残されていない。

¹⁴⁾ 敷地の区画は58年10月28日に市によって買収されている(U1(19)9-11, サン＝ピエール小教区協会がル・コルビュジェに宛てた手紙, 61.1.8)。

¹⁵⁾ E1(16)285-289, クロディウス＝プティがマジウ卿に宛てた手紙, 60.3.24.引用箇所はE1(16)288。

¹⁶⁾ Eardley: *op.cit.*, p.8では註15)の書簡が引用されつつ、ル・コルビュジェの建築世界観に言及されていく。しかし本稿本節では、史実に沿ってル・コルビュジェの敷地への関心をまず主題化したい。

¹⁷⁾ I2(8)参照。1957年から1960年に限れば、ル・コルビュジェに対する宗教建築計画に関する建設依頼は以下の7件が確認できる。Chapelle, Lokeren, Belgique, 1957; Chapelle, Anverce, Belgique, 1957; Chapelle, Speyer am Rheim, Allemagne, 1957; Collaboration pour une Église, New York, États-Unis, 1958; Église, Massy, France, 1959; Chapelle, Cheoux Rendeux, France, 1958; Église Catholique, près de Zurich, Suisse, 1959。

¹⁸⁾ ex., Chapelle, Anverce, Belgique, 1957. ル・コルビュジェは敷地選定からプログラムの立案に至るまでの関与を確約されている(I2(8)113-114, メール・プリアウルMère Priureがル・コルビュジェに宛てた手紙, 57.3.19)。

¹⁹⁾ クロディウス＝プティとル・コルビュジェの交友についてはRémi Baudouin: “Claudius-Petit (Eugène)”, in *Le Corbusier, une Encyclopédie*, Éditions du Centre Pompidou/CCI, Paris, 1987, p.101及び“Entretien avec E. Claudius-Petit”, *Pignon sur Rue*, n°19, février 1980, p.1, pp.4-6参照。

²⁰⁾ E1(4)49, ル・コルビュジェが神父コカニャックに宛てた手紙, 61.7.10

²¹⁾ 千代章一郎・加藤邦男: 「建築・場所論に関する基礎的研究(VI)—ル・コルビュジェの建築作品とその敷地選定を巡って」, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道), pp.295-296, 1995.8.参照。ル・コルビュジェの景観描写から、丘陵の頂, 水平線(あるいは地平), 傾斜地が類型化できる。

²²⁾ cf., Le Corbusier: *Entretien avec les étudiants des Écoles d'Architecture*, Les Éditions de Minuit, Paris, 1957, s.p. ル・コルビュジェは青年期の旅の途で、敷地に据えられた建築を発見し、そこに人間の声を聞いたと言う。

²³⁾ 因みにEardley: *op.cit.*, p.15でも註20)と同じ書簡が教会建築のプログラムの

- 観点から引用されているが、問題の「容認し得る admissible」は「好都合 favorable」と意識されているのみで、敷地の問題には言及されていない。
- 24) N1(2)135-136, クロディオス＝プティがS.ギーディオン Siegfried Giedion に宛てた手紙, 66.3.27参照。
- 25) 出典: *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, op.cit., P61(582). 図中のル・コルビュジェの言葉は以下の通り(左方より); “les immeubles Sive-Roux // nouvelles routes // Stade / LC // Culture et / jeunesse / LC” (シヴとルーによる集合住宅, 新設道路, ル・コルビュジェの競技場, ル・コルビュジェの青年文化の家)
- 26) ル・コルビュジェのはじめてフィルミニー訪問は, 文化・スポーツ地区計画以前の54年6月21日である。手帖の素描は, 既存の競技場を中心に東方に迫る丘陵の稜線と西遠方に広がる山並との対照を捉えている(cf., *Le Corbusier Carnets 3 1954-1957*, op.cit., 1981, H33(114, 115), S4.6.21)。その後文化・スポーツ地区にMaison de la Jeunesse et de la Culture, Stadeが依頼され, 59年6月27日には新たに依頼されたUnité d'Habitationの敷地選定のためにル・コルビュジェはフィルミニーへ二度目の訪問をしている。手帖上には, Stade 南方の丘陵の上にUnité d'Habitationのヴォリュームが据えられて, ル・コルビュジェの諸計画案との関連で景観描写されている(cf., *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, op.cit., N58(387, 389), [59.6.27])。
- 27) *ibid.*, P61(581, 582, 583), [60.6.19]
- 28) 千代: 前掲論文ではÉglise Saint Pierreによって構成される建築的景観の垂直性を指摘した。図2の垂直線はその萌芽的表象とも読み取れる。
- 29) 出典: *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, op.cit., R64(758)
- 30) U1(19)1, サン＝ピエール小教区協会による必要与件の要旨“Paroisse St. Pierre de Firminy Vert”, 60.6.19参照。すでに比較的详细にプログラムが練られ, 葬儀用の礼拝室chapelle funéraireが間もなく断念される以外, この時期に予想された機能の変更はない。
- 31) *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, op.cit., R64(749, 757, 758)
- 32) *ibid.*, R64(763), 61.6.24
- 33) *Le Corbusier*, Keller Smith ed.: op.cit., s.p.
- 34) “conception paysagiste”. (cf., *Le Corbusier: Une Maison-Un Palais à la recherche d'une unité architecturale*, Les Éditions C. Crès et Cie, Paris, 1928, p.25)
- 35) N1(1)64, F. ガルディアン Fernand Gardien がR. アンドレイニ R. Andréini に宛てた手紙, 62.6.7参照。62年6月25日の図面については, FLC16512; FLC16513; FLC16514; FLC16515; FLC16511 参照。
- 36) 出典: FLC32266, *Le Corbusier Archive XXXII*, Garland Publishing, Inc. and Fondation Le Corbusier, New York, London, Paris, 1984, p.431. 図中のル・コルビュジェの言葉は以下の通り(上方より); “église Tremblay / mai juin 1929 // -4 / -3 / -2 / église + sacristie / -1” (トランブレイの教会堂, 1929年5月6月, 4階, 3階, 2階, 教会堂と聖具室, 1階)
- 37) *Le Corbusier*, Keller Smith ed.: op.cit., s.p.
- 38) “église Firminy ? 1960” (U2(9)94, ル・コルビュジェのメモ書き)
- 39) U2(9)92-93, Ch. E.ジャンヌレ [ル・コルビュジェ] がド・サール De Salle に宛てた手紙, 29.6.5
- 40) Eardley: op.cit., pp.11-14 は, Église de Tremblay の参照理由を二教会堂の機能と空間構成の同型性から説明し, Église Saint Pierre の「誕生」をÉglise de Tremblay の形態的変奏としている。二教会堂の空間構成の類同については, 解釈は異なるものの筆者も異論はないが(千代: 前掲論文参照), 本稿ではÉglise de Tremblay の想起が「誕生」以前であることに注目し, その内部空間の意味が想起の内実としてより重要と解釈している。
- 41) 出典: FLC16626, *Le Corbusier Archive XXXI*, op.cit., p.339. 以前の図面上に半透明紙を重ねて修正している様子が伺える。修正内容の詳細については千代: 前掲論文, 図9-3-2及び図9-4-1参照。
- 42) N1(1)17, 神父タルディがル・コルビュジェに宛てた手紙, 62.12.1
- 43) cf., FLC16517; FLC16518; FLC16519; FLC16520; FLC16521; FLC16522; FLC16523; FLC16524; FLC16525
- 44) cf., *Le Corbusier*, FLC16526, 63.12.23; *Le Corbusier*, FLC16531, 63.12.23; *Le Corbusier*, FLC16527, 63.12.23; *Le Corbusier*, FLC16529, 63.12.23. Fondation Le Corbusier に保管されたル・コルビュジェ生前最後の図面。
- 45) 61年7月29日の段階で建設費概算は1,300,000NFであったが(N1(2)6-7, ガルディアンによる会合報告書, 61.10.2), 63年5月22日に正式な契約が交わされ, 建設予算は970,000NFに定められている(N1(1)57-58, “Convention Régulants de l'Intervention de l'Église de Firminy-Vert”, 63.5.22)。その上に浸食地盤のための特別工事費が予想され, 更なる建設費縮小が急務となった(N1(2)63-64, サン＝ピエール小教区協会の経理担当者R.ポルタフェR. Portafaixがル・コルビュジェに宛てた手紙, 63.11.29)。
- 46) 例えばChapelle de Ronchampの制作の場合, 事後的に見ればその全体規模が縮小されている。またCouvent de la Touretteの制作の場合, 地階部分が削減されるものの, 全体配置構成に関わる建築的ヴォリュームは削減されず, 建設費の問題は仕上げの簡略化によって解決されている。
- 47) N1(1)23-25, ル・コルビュジェが神父タルディに宛てた手紙, 65.1.21. 引用箇所は N1(1)24.
- 48) 出典: *Le Corbusier*, Keller Smith ed.: op.cit., s.p. 図中のル・コルビュジェの言葉は以下の通り(左方より); “Est / Stade // Firminy Vert // entrée // Nord // Sud // 30” (東に競技場, フィルミニー＝ヴェール, 入口, 北, 南, 30)
- 49) たしかに61年6月の最初期の素描においても天井採光について記されているが(図2参照), この時期までは全体ヴォリュームの検討が主であり, 採光効果に関する具体的な検討を図面に認めることはできない。また同じ62年12月19日と翌日, ル・コルビュジェはAssemblée de Chandigarh下院上部の自然光の制御機構を参照していたことが, *Le Corbusier's Firminy Church*, op.cit., p.63, fig.62-63から分かる。Eardley: op.cit., pp.12-13 もAssembléeとÉglise Saint Pierreとの関連性について触れているが, 同時期に参照される後述の聖ソフィア寺院とAssembléeとの関連には触れていない。本稿では, 高さ削減を余儀なくされた時期に言及される聖ソフィア寺院の内部空間の拡がりに注目するため, Assembléeの参照は, 差し当たって, 聖ソフィア寺院に看取された意味的な内実の技術的解法検討と解したい。
- 50) 出典: *Le Corbusier*, Keller Smith ed.: op.cit., s.p. 図中のル・コルビュジェの言葉は以下の通り; “St Sophie. les rayons solaire à heure cosmique / (Solstice d'été à Stonehenge angleterre druidique)” (聖ソフィア寺院, 太陽光線, 宇宙的な時間, (英国ドルイド教のストーンヘンジの夏至))。ストーンヘンジへの言及の意味は定かではないが, ル・コルビュジェはそこに, 天空に広がるかつての「宇宙的な時間」を捉えていたのかも知れない。
- 51) *ibid.*, s.p.
- 52) 実際にル・コルビュジェが「東方への旅」でイスタンブールを訪れるのは1910年ではなく, 1911年7月5日から同年8月21日である。
- 53) *Le Corbusier: Le Voyage d'Orient*, Les Éditions Forces Vives, Paris, 1966, p.66
- 54) “espace vaste dont on ne saisit pas la forme” (*ibid.*)
- 55) 千代: 前掲論文では, 外部景観の構成の観点から聖ソフィア寺院をÉglise Saint Pierreにおける部分的な参照物と判断したが, 内部空間の意味の感得という次元では聖ソフィア寺院が部分的に参照されているとは言えず, 前稿の断定を訂正しておきたい。なお, Eardley: op.cit., pp.18-19 もやはりル・コルビュジェの「東方への旅」の聖ソフィア寺院の記述を引用し, 「偉大さは意図にあり, 規模にはないLa grandeur est dans l'intention; et non pas dans la dimension」(*Le Corbusier: Quand les cathédrales étaient blanches, voyage au pays des timides*, Denoël, Gonthier, Éditions Plon, Paris, 1937, p.34)というル・コルビュジェの言葉からÉglise Saint Pierreの建築的形態の記念碑性を解釈し, ル・コルビュジェに好まれる景観図式を論じている。それに対して本稿では, 聖ソフィア寺院とÉglise Saint Pierreとのある種の同一性を解釈する点ではEardley論文と共通するが, 後述のル・コルビュジェの書籍引用からも明らかのように, 具体的な敷地に現成する建築作品へのル・コルビュジェの眼差しにも注目し, 敷地と想起される場所との対照を明らかにしたい。
- 56) N1(2)80-81, ポルタフェがル・コルビュジェに宛てた手紙, 64.4.7参照
- 57) U1(19)88-89, ル・コルビュジェがChapelle de Ronchampの礼拝堂付司祭神父R.ボル＝ルダ Abbé René Bolle-Reddat に宛てた手紙, 64.5.12. ル・コルビュジェがÉglise Saint Pierreの実現協力を求める内容。引用箇所はU1(19)88.
- 58) 出典: Roger Aujame, association Le Corbusier pour l'église de Firminy-Vert: *Le Corbusier, Église Saint-Pierre de Firminy-Vert; ensemble, reprenons le chantier*, s.l., s.d., p.16. 図中のル・コルビュジェの言葉は以下の通り; “le 8 juillet 1964 / Tardy / Mazioux non” (64年7月8日, 神父タルディ, マジウ卿が拒否)
- 59) この意味で, 「東方への旅」において聖ソフィア寺院とその敷地との関係が研究されている点も興味深い(*Le Corbusier* (Ch.-E. Jeanneret), 中村貴志・松政員治訳: 『ル・コルビュジェの手帖—東方への旅』, 同朋舎, 1989, Carnet 2(116)参照)。
- 60) Paul Chappel: “Querelles à Firminy autour du Clocher de Le Corbusier”, *Le Monde*, 1974.1.23, p.31
- 61) このような構想過程の動態を鑑みれば, 聖ソフィア寺院の「静寂の場所」とÉglise de Tremblayの「瞑想の場所」との関連は, 暗示的なものに留まり, 明確には知り得ないように思われる。

(1998年5月10日原稿受理, 1998年11月19日採用決定)